

Subspeciality は“子育て支援”

かるがも藤沢クリニック

江田明日香

保育所を建てようにも、子どもの声がうるさいと苦情がくる世の中。子育てしながら働くためのインフラ整備がなかなか進まない理由のひとつは、子育ては当事者である期間が短くて当事者意識が失われがち、みな「喉元過ぎれば熱さを忘れてしまう」からではないかと思っています。

私は医師 5 年目に出産しました。小児科専門医は妊娠後期のお腹を抱えて受験しました。その頃内科医の夫は忙しく、実家に頼りながら私が病院勤務に復帰するには違和感があり、少しのパートと子育てをする暮らしを選びました。産後すぐに復帰する先輩方もいる中で、私は Subspeciality もなく、これで良いのかなという後ろめたさが常にありました。次男が生まれてからは毎日絵に描いたようなバタバタ育児生活。世の母親と同じ「孤育て」をじっくりと体験しました。

そんな中、パート勤務していた上大岡こどもクリニック佐藤順一先生が、女性医師への子育て支援として勤務中の託児を用意するというアイデアを実践され、私を含む数名の女性医師が託児を利用しながら働かせていただきました。このおかげで子どもの預け先に困ることが減り本当に助かりました。いつからか次は自分が支援する立場になりたいと考えるようになり、「家庭をもつ女性医師が仕事をシェアするクリニック」を発案、佐藤先生と一緒にクリニック作りに挑戦することになりました。

私の仕事は、子育て当事者として「クリニックにあつたらいいな」を形にすることでした。具体的には、管理者院長として女性医師への職場支援をすること、また保護者に向けた「子育て支援」を実践することです。

2015 年に 6 月に開院、現在は女性医師 7 名が勤務しています。必要な医師は託児を利用できるようにしました。子どもの病気などでの急なお休みも明日は我が身のお互い様、皆で気持ち良くフォロー合っています。去年は医師 2 名が出産し早々に復帰してくれました。今後も子育て急性期の“止まり木”のような職場でありたいと思っています。

日々の診療では保護者との距離感が近く、“育児あるあるネタ”で盛り上がることも度々。孤育てをしている母親がネットから拾った情報に混乱しないように、スキンケアや母乳育児などテーマを決めて親子クラスを開き情報提供するなど、クリニックならではの子育て支援ができるようにスタッフ皆と試行錯誤しています。

仕事と育児とで忙しく動き回る生活になった今も変わらないのは、自分自身の子育てから発見することや学ぶことが仕事のヒントとなることです。どうしたら前向きに漢字を学ばせられるだろう？夜オムツをどうやってはずそうか？と、母親として悩みはつきませんが、ひとつひとつに向き合って子ども達と一緒に成長できればと思っています。

そして、そんな私の子育てがひと段落する時がきても、「子育て当事者の喉元の熱さ」を忘れることなく時代に求められるクリニック運営ができるように、アンテナを広げていきたいです。

<著者略歴>

えだあすか
江田明日香

かるがも藤沢クリニック 院長

平成 16 年 杏林大学医学部 卒業

平成 18 年 横浜市立大学小児科学教室後期研修医として関連病院に勤務

平成 21 年 長男出産を機にパート勤務

平成 27 年～ 現職

自分の出産がきっかけで母乳育児支援に興味をもち、目下勉強中です。
エビデンスに裏付けされた母乳育児支援が広まるように、地域や学会で活動しています。

男女共同参画推進委員会より

「育児も仕事も『ワンオペ』ではなく『シェア』が大事」

近年よく耳にするようになった「ワンオペ育児」。「ワンオペ」とはワンマン・オペレーションの略語で、飲食店やコンビニ等のお店で、人手が少ない時間帯に一人の従業員で全ての作業を行うことを指す言葉として使用されていたようです。家事と育児を一人で行っている状態は「ワンオペ育児」と表現されますが、筆者のように「孤育て」をしながら、さらに仕事もこなす女性が増えてきています。総務省の調査によると、年齢階級別育児（未就学児を対象とした育児）をしている30～40代女性の有業率は、平成24年では約5～6割であったのが、平成29年には6～7割へと増加しています。このような現状から「イクメン」の必要性が高まり、職場の理解が求められる中で「イクボス」という言葉も聞かれるようになりました。

そもそも、「operation」と聞くと、医療の現場にいる我々は「手術」を思い浮かべます。手術は一人つきりのできるものではありません。これからの働き方改革の中で、育児も仕事も「タスクシェア」が浸透し、「孤育て」で苦勞する母親が減り、男女問わず皆が心にゆとりを持てる社会になってほしいものです。